慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人類学における「構造論」の社会学的展開
Sub Title	Sociological develoyment of structural theory in anthropology
Author	戸沢, 行夫(Tozawa, Yukio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.57 (1971. 3) ,p.111- 135
JaLC DOI	
Abstract	Social cultural fact has two characteristic sides, "the historical and the structural." Therefore, it should be studied scientifically from the two sides. Generally, the historical has been studied by history and the structural has been by anthropology. But I think they should be fundamentally studied as a whole. In this article, first, the some concepts of "structure" are mainly adjusted and studied. They are that of R. Brown, R. Firth and C. Levi-Strauss. Especially, we must pay attention to the structure which Levi-Strauss thinks as a model, since it seems that the structure as a general idea has a possibility to approach to the historical. When we try to think of sociology as an actual science and begin to cognize a concret social fact, the character of such structure will offer us a unique suggestion.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000057-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人類学における「構造論」の社会学的展開

戸　沢　行　夫

一　はじめに

フランス革命後の混沌とした社会，その危機を打開しようとしたところに社会学は，近代市民社会の科学としてA・コントによってはじめて体系化されることになった．その様な危機打開の科学として，歴史的に性格づけられてきた社会学は，その後もすぐれて現在的な関わりを科学的に追究しつつ，自らを発展，深化し，それなりの成果を遂げてきているといえよう．それはたんにその研究対象において現在的であるだけでなく，理論的にも現在的な関わりをもった実践的要求から根ざしたものといえるであろう．

しかし，その様な「現在学」としての性格を歴史的に担ってきた社会学は，その「現在性」を真の科学的な発展において十分に担えきれたかというと，それにはまだ疑問の余地があろう．それはまさに社会学がたんに「技術の学」にとどまるだけのものではなく，それ自身すぐれて現在性を担っているがゆえにである．

われわれは科学としての社会学の成立を認め，さらにそれを現在学として規定しうるならば，あくまでその現在性の呪縛から自由に，そしてまた逆にその深部において呪縛さえをも把え返すかたちでの理論的検討が必要なのではなかろうか．その様な検討は社会学の理論的な原点に逆のぼることと同時に，その問題の普遍性のゆえに，近隣諸科学との関連においてもなされねばならないであろう．社会学そのものの科学としての歴史的な浅

薄性を考え合わせ，また逆に，既に確立をみた諸科学がそれぞれの固有の領域を越えつつ交流し合う現在の科学的動向を考慮に入れれば，なおのこと，近隣諸学科との方法論的な連関とその深化こそが，むしろさし当っての必要事のように思われる．

特に社会学が現在学であろうとするためには，すぐれた分析的視点を必要とするであろうし，それは実証研究への脈絡においても意味をもってくる．そして，その様な視点は所謂，構造論的な視点として，これまで人類学の多くがとってきた方法論的視点にほかならないものである．

初期の進化主義，伝播主義は別として，人類学の多くはその植民地主義時代の原罪を背負いながらも，近来においてはそれを脱皮することによって方法論的にも新な発展をとげつつある．人類学は未開社会の所与の現在において，そこに隠されている「構造的なもの」を素裸の素材をもとに把握しようとしてきた．B・マリノフスキー，R・ブラウン以来の英国機能主義，あるいはE・デュルケムを中心としたフランス社会学主義にみるA・コント以来の実証主義的脈絡は，その所与の「現在」社会の「構造的なもの」に注目し，それをさまざまな社会文化事象の「関係」(relation)と「機能」(function)を分析していくなかでみてきたのである．そしてその「構造的なもの」は，後に人間社会一般における「不変的なものの」把握に有効な方法論を提出することになる．

また一方，現在学としての社会学が過去から未来への橋上に視点をおく，とすれば，そこには構造論的分析にのみとどまることのできない「歴史的なもの」への何らかの視点を必要としてくるであろう．

歴史学の多くはこれまで社会文化事象の「変化」とその「過程」の実践的把握を主眼とするか，あるいは歴史的事実そのもののたんなる記述にのみ終始するかであった．それは社会の発展の論理を発見するのに努めると同時に，そこに何らかの「法則性」をも見出そうとするものである．現在のなかに多次元的に重層化されてある過去，そしてその様な現在から未来

への変化とその要因の把握に主眼をおく社会学は，この「歴史的なもの」の視点を当然必要とすることであろう．

人類学と歴史学がそれぞれもとめてきたもの，社会文化事象における「構造的なもの」と「歴史的なもの」，それらはこれまでの両者の豊な長い軌跡のうちにそれなりの多くの成果を遂げて検討されてきている．しかし，それぞれでの特性は，それぞれ相互に他方にとって，なお検討されるべき欠落点として残されたまま固定化される傾向にあることは，近代科学の脈絡の上で否めないことであり，それはひとつの一般的な傾向性としてさえみることができる．そこにはなお「全体性(totality)」を志向する「論理的なもの」の構築がまず方法論的に必要であり，ここでは社会学を現在学として規定することによってそれを考えてみようとするのである．それはあくまで具体的な人間の営為とその所産である社会文化事象の分析を通してそれらの全体性を，そのおかれている現在性において，即ち，そのつどの所与の社総会体において把えることを可能態にしていくような論理をもち合わせていなければならないであろう．そして更に，その論理が実証的な深まりのなかでなお現実的なリアリティをもって受け入れられるとき，それはひとつの実践の論理として普遍性をもつことにもなるであろう．

この小論においては，社会学を現在学として規定したうえで社会文化事象に内在する「構造的なもの」と「歴史的なもの」とにみられる論理的展開を人間の具体的な営為を考慮に入れながら，人類学にみられるいくつかの「構造」概念を整序しつつ，検討してみようとするものである．それはこれまでも多くの困難性をともない，今後もなお近代科学の論議の中心テーマといえるものである．何故なら，われわれ人間の具体的な存在とその営為のすべては，構造的性格をもつそれぞれの所与の現在性においてもっとも現実的に営まれており，それはいわば「くり返し(repeated)」営まれ多次元的に重層化，定着化されていく日常性そのものであり，それなりの正統性を備えているからである．と同時に，その様な日常的な営みこそが，人間の存

在と意識との飛翔を通して社会の発展の論理を萠芽させうる唯一の土壌としてもあり，それは非日常的な営為の過程を通して発展していく歴史的展開そのものに他ならないからである．

われわれは今や「変化するもの」と「不変なもの」等々の固定化された二元論的発想がすでに無意味であることを知るべきであり，むしろそれぞれがつねに相互にウラ返しの関係として一方が他方にとっての存在根拠である，と同時にそれぞれがそれなりの正統性をもつという事実を見逃してはならないであろう．そして，それは構造的性格をもった日常性のなかで具体的に表現されるものであり，それへの接近は，過去と未来の橋上にある現在そのものからの全体性の把握に他ならないのである．そしてその全体性の把握は，客体に対して自らもまた客体として働きかけるような創造的主体が，その相互作用の場である所与の ≪現在≫ において具体的な対象の本質をつかみだそうとすることから発足することになる．その様な論理的な経過をへることによって初めて，人間の営為は，日常性から脱出し発展しうる高次の論理をもつことになるのではなかろうか．

この様な大まかな論理的パースィペクティヴをその基底に構想しながら，その論理の脈絡上，この小論は「構造」そのものの検討とその整序を人類学の側から進めてみようと思う．それはもちろん現在学として規定してきた社会学への具体的な手掛りのひとつでもある．

註

（1）「くり返し」(repetition)としての時間と「過程」(process)としての時間の区別は，レヴィ＝ストラウスにおいて「reversible」と「non-reversible」という形で語られ，それはE・リーチ「時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ」において一層整理されている．それはE・デュルケム，M・エリアデにおける「聖と俗」あるいは日本における「ハレケ」との関連でみることができる．またそれは共時論，通時論という「時間」との考え方の問題でもあり，そこにひとつの日常社会の歴史哲学を考えることもできるが，これらの関連の論述は別稿に譲りたい．

二　R・ブラウンとR・ファースにおける「構造」について

「構造」概念のこれまでの考え方も，やはり大別すると歴史学におけるそれと，人類学とにおける場合とでは多少の相違点がみられる．まず，歴史学的な考え方においては，なお史的唯物論の基本的な定式に従ったかたちで，構造は「社会構造」として階級的構造を指し，具体的にはあるひとつの社会構成を下部構造として規定している経済的構造のみをさしているといえよう．つまり，生産諸力と生産諸関係からなる生産様式こそが経済的構造として社会総体に対して決定権をもつという唯物論の定式が歴史学の主たる構造の考え方といえる．しかし，それも一時は経済決定論への傾斜を強めたが，「土台・上部構造論」等々の社会構成体の問題でもあり，マルクス主義科学論の中心課題として今後もなお続く論争である．そういうなかでつねに問題となる，いわゆる上「部構造」の土台に対する「相互依存性」(interdependence)及び「反作用」(re-action)をも含んだ「相互性」(reciprocity)そして「自律性」(autonomy)の問題は，まさに構造の重要な特性としてあるといえよう．そこから歴史学における一分野としての思想史なり，文化史の独自の領域が構想されてくるのである．しかし，その思想や文化も経済的構造に対して，いかなる相互性と自律性において関係するかの問題はなお残されており，それは社会総体における構造の規定性として，マルクス主義理解そのものの問題となる．

この様な社会総体における経済的構造の優位性に対して，いわゆる「上部構造」である親族体系や婚姻体系その他の社会文化事象の規範的体系に，より一層の構造的規定性をみとめてきたのが，人類学の視点であった．そこでは社会諸関係のなお未分化な原始社会なり，未開社会なりを対象にしていくことで，親族や婚姻の規範体系を科学的に分析すること自体を，直接的にその社会の構造の発見に結びつけていくことができるものと考えられてきた．しかし，その様な視点はたんに対象となる社会の特殊性においてではなく，むしろ方法論的な問題として考えられる必要があろう．人類

学における構造の概念は，ただ経済的構造のみにその所与の社会総体における構造的視定性をみとめるだけではなく，経済的構造をも内包したかたちで考えられており，その構造はいわば，社会総体の統合的な「原理」(principal)としてある．またそれは社会文化事象の「関係」と「機能」の分析を通して追求されるが，そこには構造論にとって必須な「体系」(system)の問題とそれにともなうレヴェル論を必要としてくる．

この様に人類学と歴史学における構造の考え方には多少の相違がみられるが，共通の部分も多くみられる．即ち，一般に構造とは，ある集団の構成員及び構成諸要素が，ある一定の関係をもって占める社会的地位と役割に応じて営む行動の全体が，相互に関連しあいながら構成しているもので一定の持続性をもったもの，と規定することができる．そこにはつねに体系の存在が意識的に，あるいは暗黙のうちに前提されているのが普通で，その場合構造は具体的に共同体なり，地域社会なり，あるいは社会総体を一定に秩序づける統合的な原理として考えられている．そしてひとつの体系に内在するいくつかの構成員と構成要素は，それぞれの全体における配置が考慮されると同時に，そこに秩序あるものとして関わっている．この様に考えられる構造は，それに関わっている体系がすでに均衡的で自己完結した集合体として前提されており，はじめから静態概念であるが故に，そこに含まれている構成員及び構成要素の行為や役割の範囲も，ただ自己を維持，存続させるために単純に再生産されていくものでしかない．そして，たとえそにこ「変化」(variance)が引き起されるとしても，それは諸要素間の機能的変化や位置関係の変化としてあるに過ぎず，体系そのものの変化，つまり所与の社会の「変動」(change)に結びついていくことはなく，むしろ均衡的体系内変化として，その構造のなかに吸収され，それの固定化と存続に役立つような適応の可能性をもつ「変化」に止まるものである．

人類学に特徴的にみられるこの様な構造の考え方は，体系をアプリオリに前提し，固定化するために，そこに見られる「変化」も構造的定着を志

向するものでしかない．そこでは，その構造にとってはマイナスであるが，しかし所与の全体社会においては発展的契機となりうるような「変化」の把握は捨象されてしまい，そこに構造論への大きな批判点のひとつがある．

例えば，英国機能主義のR・ブラウンは，ひとつの具体的な地域社会を集中的に研究することによって，その内に含まれている社会文化事象の相互関係を，それらの間にみられる「機能」というかたちでみようとした．そこで彼は最初から歴史性を捨象するが，それは決して社会文化事象そのものの歴史性の否定ではなく，むしろ彼が歴史の重要性を自覚しているための厳格な態度からきている．それ故に，R・ブラウンの構造は，アプリオリに措定されており，それは基本的に「現実に存在する社会関係のセット」として，あくまで「具体的な実在」そのものである，(「Structure and Function in Primitive Society」p. 120) そこには，E・デュルケムと同様に，生物有機体における構造に比せられる経験的実体としての構造の考え方が基底にあり，それは直接観察可能なものである．R・ブラウンの社会構造は，社会の構成諸要素間の関係を一定に秩序づける体系であり，諸実在間の関係のセットとしてある．それは社会統合の性格をもち，諸関係間にみられる機能とは，つねに全体として「多かれ少かれ安定した社会構造，即ち，成員相互の関係を決定，整序し，社会生活を秩序あるものとなす自然環境への外的適応と成員及び集団間の内的適応を可能にする諸集団の安定した諸体系に個々人を統合することである．」(「Method in Social Anthropology」p. 62)

こうした意味でR・ブラウンは，人間社会におけるひとつの全体としての社会構造を，そこにみる機能の仕方において観察するが，それは構造と機能の密接な連関を示しており，それらは相互の適応の可能性のうちに語られている．そしてまた社会は，その内にある構成要素が同一性をもたなくても，その社会構造を存続させる限り，その生命を保ち，そこにその特性としての「持続性」(continuity)をみることができる．その持続性とは「社会生活の過

程によって維持されるもので，その生活の過程は個々の人間及びそれらが結合された組織的集団の活動と相互活動」より成立しているという．(「Structure and Function, p. 180.) そして社会構造は，具体的には相互に関連し合ったた人間の配列を，社会組織は単位的に整序された諸個人の活動の配列をそれの基本的なものとして考えている．

R・ブラウンの構造は，以上みたように直接に，観察可能な具体的実在としてアプリオリに措定されており，そこでの社会集団あるいは諸個人など，構成諸要素の社会的関係とその役割による位置関係等々は，具体的な経験的実在としてみなされている．

この様な見解は「人間の行動」から発足し「広い異なった環境において人間がいかに実際に行動しているかを観察し，また彼らの行為における共通の要素と変化」を研究するR・ファースの場合にも同様にみられる．(「Elements of Social Organization」p. 16)．

彼は人間の社会的集団や社会関係を分析するに当って，それを「社会」「文化」そして「共同社会」に区別し，それらに対応した具体的な分析の論理として，それぞれ「社会構造」「社会機能」「社会組織」が設けられている．R・ファースは，従来同一視されがちであった社会構造と社会組織とをはっきりと区別し，そこに構造の独自性をみようとした．そこには「集団的関係あるいは理想的パターンである社会構造を抽象的なことばで考えれば考えるほど，具体的活動である社会組織を分ける」必要があったのである．(同書 35～36 頁) R・ファースの社会構造は，社会の理念的，形式的な統合のパターンであり，それは「実際の行動の維持あるいはその繰り返しからなっているもので，社会生活の持続原理(continuity principle)としての意味をもっている．」いわばそれは社会的行為と慣習の形式化された原理なのである．(同書28～30頁) 他方，社会組織は，諸個人の具体的な行動に重点をおき，さまざまな役割を営む社会の構成員が，ある一定の目的に達するために，一定の秩序のもとに結合された規則的な相互作用の様式としてある．と同時に，「決

められた行為によってなされるものに達するための社会過程であり，そのための行為の整序」でもある．(同書36頁) そして更に，そこには諸個人の「行為の決定と結果の説明」のための「時間」の要素が入りこみ，それは「組織的変化」であり，そこには社会生活の「変化の原理」(variance principle) が見出されるという．しかし，その様な変化も社会構造に従属するもので，それの更に一層の統合と維持のために機能的に奉仕するための変化にしかすぎず，それがそのまま構造の「変動」に結びつくものではない．R・ファースは，人間の行為を集中的に分析し，さまざまな社会関係の全体的関連と意味とを可能な限りの広い範囲において比較することによって，その行為のパターンばかりでなく，その変化の程度，そしておそらくはその変化の原因をも探ぐろうと意図したのであった．しかし，究極において彼は「可変性をつくり出すのは適応の可能性であるが，人間は意識的あるいは無意識的に，自分が従属しているコースを選ぶことになる」として，社会の変化過程の把握に自ら限界を与えている．(同書 40頁)

R・ファースは，社会総体をその抽象のレヴェルに応じて「構造」と「組織」に区別し，後者に人間の具体的な行為の構造ともいうべき特性を与え，そこに変化の要因を見出そうとしたことは構造論の新な発展であろう．何故なら，そこではたんに体系内の機能的関係や位置関係ばかりでなく，体系相互間の関係も問題になってくるのである．それはつまり，人間の日常的な営為が一定の時間と空間の広がりのなかで，諸個人の社会的評価と選択をともなって決定されたとき，そこから起る組織的変化は構造的適応性ばかりでなく，その量的変化が構造的変化へと質的に結びついていく可能性と蓋然性をもつものと見ることができるからである．これまで述べたように，人類学における構造は主としてアプリオリに均衡的静態的概念として措定され，それは経験的実体として機能的な社会関係のセットであり，社会の統合と持続の原理として考えられてきた．

しかし，より深い実在としての構造とそれに関連する変化の要因を把えん

とするとき，構造そのものをむしろモデルとして意識的に概念化して考え，それらを構造的連関のうちに演繹的に把えかえそうとするレヴィ＝ストラウスの方法は，構造論にもう一つの新しい方向性を与えているように思う．これまでの構造の考え方は，共同体や小集団などの分析に多くの成果を上げており，それは主としてそこに含まれる構成要素の「関係」と「機能」における現象的分析に止るものであった．より深い構造的な本質は，それらの分析を踏まえた全体性として，むしろそれらの背後に隠されているのではなかろうか．われわれはその様なより本質的な実在としてある『構造』に迫らなければならないであろう．

三　レヴィ＝リストラウスにおける「構造」について

これまで見たように，人類学は初期の進化主義，伝播主義を別とすれば，その方法論的な主流は構造論あるいは構造機能論であるといえよう．それはつねに体系とレヴェルの問題を含んでおり，科学的認識の可能性とは，まさにこれらの問題の論理的整序から発足することになる．このことは，社会学を現在学と規定し，そこから多次元的に重層化された過去と未来の交錯を人間の具体的営為と社会文化事象を介して解きあかす場合にも問題になることである．R・ファースは構造と組織とを区別して構造論に新な方向性を与えたが，レヴィ＝ストラウスに至って，この区別は一層明確になり，それは「社会構造」と「社会関係」という形ではっきり区別されてくる．レヴィ＝ストラウスは，自らの科学を人類学にもとめつつ，それを「人間の科学」として性格づけるが，その基底に流れている科学観は彼自身の次の言葉に端的に示されている．

社会科学が目的としているのは，ひとつのモデルを作り，そのモデルの特性やそのモデルの実験室での様々な反応の仕方を研究し，次いでこれらの観察の結果を経験できる次元で起ることがらの解釈——それは予見されたものからひどく隔たっていることもありうるのだが——に適用す

ることである。」(「Tristes Tropiques」邦訳「悲しき熱帯」)

レヴィ＝ストラウスの構造もこの科学観に基礎をおいている．それはまず方法論的にモデルとして概念的に設定され，次いでそれを具体的に経験的な社会文化事象に照しながら，そのより深い実在へ近づこうとするものである．彼はまた次のようにも述べている．「真の実在は決して最も明瞭なものではない．更に，真実というものの本性は，真実が身をかくそうとするその配慮のなかに，すでにありありとうかがわれる」と．(同書403頁)

この様な科学観は，マルクス主義にそのひとつの淵源を求められるが，レヴィ＝ストラウスは他に地質学や精神分析学そして言語学からも多くの示唆を得ているという．彼は，より深い実在に到達するために，まず体験されたものをいったん拒否し，対象化することを強調する．それは社会総体を社会構造と社会関係に区別することでもある．その構造は，経験的な実在に直接関係しているのではなくて，むしろ経験的実在にもとづいて想定されたモデルとしてある．そして社会関係の方は，あくまで経験的なものであって，モデルとしての構造を組立てるための素材としての有効性をもっている．ここに諸々の経験的な社会関係を素材として想定されたモデルとしての構造は，それを対象化するための道具として操作することによって，より深い実在である『構造』へと迫っていく．そのことは必然的に帰納的な方法をとるのではなく，演繹的な方法をとって実在へと接近することになる．次に，この様なモデルとしての構造は，それ自身いかなる特性をもつものであろうか．レヴィ＝ストラウスは，次の四つの条件をもって，彼の構造概念の特性としている．

(一) 構造は体系としての性格を示す．それは数個の要素からなり，そのうちの一つでも変化すれば，他のすべての要素も変化せずにはいない．

(二) ある与えられたモデルには，一群の同型のモデルに帰着するような一連の変換群を整序する可能性がなければならない．

(三) 以上の諸性質により，その要素の一つないし数個がある変化をとげ

たときにモデルはどのように反応するかを予見することが可能にされる．

㈣　モデルは，観察されたすべての事実を直接に理解できるものとするように構成されなければならない．(Structural Anthropology)

ここに「構造的」なものと「構造論的」なものの相違が明確にされてくる．即ち，構造的とは，具体的な社会文化事象についていわれることで，あくまで構造的な実体がある．それは具体的な事物のなかに隠されており，ある所与の構成のなかで決定因の役割を果す．他方，構造論的とは，構造的なものの認識と隠されたものの発見のためにモデルを設定し，あてはめることである．つまり，同様の関係がいくつかの構成において，いくつかの異なった，そして同じように決定因的な仕方を実現するものとして把握されるとき，それは構造論的ということができる．ここに，分析のためのモデルとしての構造は，それ自体ある所与の社会において記述される社会関係そのものではなく，むしろ諸々の社会研究に適用されるべき方法として意味をもってくるのである．

レヴィ＝ストラウスは，この様なモデルとしての構造に，体系としての性格を一層強調している．そしてその体系は当然その内にいくつかの構成諸要素をもち，そのことは更にその体系の全体とそれぞれの「構成要素」との関連及び配置の問題に関わってくる．つまり，構造はひとつの全体性の内的分析であると同時に，体系としての性格をもつことで，すべての構造論と同様にレヴェル論との関係を必然とする．即ち，モデルとしての構造が設定されるとき，それはつねに所与の現実社会の諸事象に直面するが故に，またそうすることでより深い実在としての構造へ接近しうるが故に．現実の諸関係をいくつかのレヴェルに別け，更にそれぞれのレヴェルに対応する体系において，それぞれの特性を十分に表現しうるようないくつかの諸要素を原素材として構造のモデル化がなされなければならない．それ故に，構造はひとつの体系の全体性の内的分析として，そこに含まれる諸要素とそれらの相互連関及びその連関自体の配置などの諸関係を把えるた

めのモデルであることから始って，その様ないくつかの体系相互間の連関を経て，それらを包含する全体社会のより深い真の実在へと志向するものである．この意味から構造は，実在的なものの固有性として概念化された論理的枠組において把握された内容それ自体ともいうことができる．

この様な構造の体系性は，現実の社会総体に対応した体系としてある全体社会体系(totol soceal system)と関連するとき，最も有効であろう．むろんその社会総体は，その内に無限数個の下位総体(sub.wholes)の設定を可能にするであろうが，それはつねに現実的な社会構成との対応において，真のより深い実在に接近しうる最も蓋然的な基盤となるものである．

レヴィ＝ストラウスの構造は，分析の道具として，現実に生きられた構造から発足することによって，「意識されない(unconscious)」隠された構造を見出そうとするモデルに関わるものである．つまり，それは現実社会において「意識されたもの(conscious)」としてある社会諸関係を原素材にして，諸々の規範体系である「生きられた(lived-in)」構造を分析し，それを踏み台にして意識されない「考えられた(thought-of)」構造である深い実在の発見に向うことである．その場合，構造はひとつの秩序の体系としての性格をもつため，実際にはあまり意味もなく，また時々，偽わりのことが多い「規範(norm)」がその存在の正統性ゆえに分析の対象として有効性をもってくる．

次いで，この様な構造の諸特徴から，レヴィ＝ストラウスは現実の社会総体に対して，つねに対応関係を保ちえるような構造相互間のうちに変換の群構造を考えようとしている．それ故に，彼はつねに「諸秩序の秩序(order of orders)」の発見につとめるのである．それはこれまで述べたことからも「諸体系の体系」として，あるいは「諸構造の構造」の発見と言い換えることができる．それも同様に，そのつど現実の社会総体との関係において考えられるべきで，究極的には諸体系の異なった形のネットワークとして，全体社会構造(total social fabric)の形成へと結びついている．即ち，あるひとつの体系が概念的に設定され，それの特性を明示するような構造がまず認識されるが，それに対応して諸々

のレヴェルでの諸体系がまたそれぞれひとつの要素になって構成されるような，より包括的な体系もまた考えられてくるのである．それは論理的に無限数個の諸体系の体系を形成するもので，共時的(synchronic)な軌跡の漸次的拡大として，同心円的な広がりと同時に，通時的(diachronic)な基軸をも諸体系の連関のうちに含んでいる．その様な体系の特性である構造は，全人類史の構造として，いわば人類の「全体知」を論理的に認識可能なものとする目標をもっている．このことはレヴィ＝ストラウスの科学観からも明らかなように，経験的ないくつかの社会的事実の諸関係を実験室にもち込み，そこで創られた概念ひとつひとつではなく，それら概念相互の関係を重視した，より包括的なモデルの構成が意図されていることを示している．それはいくつかの構成要素からなる諸関係の体系を，すでに知られている体系の特殊な一例として，それら全体の意味を明らかにするために，ひとつの体系から他の体系への変化移行を説明可能にするような，その様な変化の「規則性(regulality)」を発見しようとする態度にほかならないのである．

ここに至って，体系は従来の均衡論的な静態概念に止まることはできない．体系の性格をもつモデルとしての構造は，体系を調和の保たれた全体としてアプリオリに扱うのではなく，はじめから不均衡なものをそのなかに内包した動態的性格をもつものとして概念的に措定される．即ち，モデルとしての構造は，つねに変化の要因を含んだ諸体系にそれぞれ対応しており，そのひとつひとつの体系それ自体も函数的な相互関係にある構成要素の函数であると同時に，そのひとつの体系の内部の一要素の変化によって起因するその体系の変化が，他の体系の変化をも誘因していくことになる．諸体系の体系が，ひとつの開かれた全体として全体社会体系として把握されるとき，その特性である構造は，それ自体のなかに自らを否定していく契機をも含んでいる．そしてそれは，ある社会構成のなかにあって，ひとつの正統性をもった秩序としての特性をも示すことになる．しかし，日常的な変化の過程の集積こそがたとえこのそれぞれの諸体系の変化から

発足しても，漸次的に，あるいは急激に諸体系の体系の変動へと導かれていくことになるのである．その意味からも，構造のモデル化は，この様な社会諸関係の動態的性格をも考慮した通時論的視点を備えもっている必要がある．それは社会総体に含まれる諸体系のそれぞれにおける構成諸要素の機能的均衡的な適応関係という「ヨコ」の関係ばかりではなく，それら諸体系相互間の連関とそれらの集合体である開かれた全体社会との「タテ」の関係の問題でもある．

モデルとしての構造は，この様な動態的性格を変化の要因としてもつ体系の特性であると同時に，それは，開かれた全体としてつねに社会総体の変動を導き出すように設定されなければならない．そこに構造論が，現実社会の基底である人間の日常的な営の分析為か発足らし，しかもそれに一方的に埋没することなく，むしろそこを基盤として次の発展の論理をも用意しうるものとなりうるのである．

レヴィ＝ストラウスが構造をモデルとして設定し，なまの社会文化事象の間にみられる社会関係をひとたびつき離し，対象化しようとすることは，具体的な人間の日常的な現在社会におけるより深い実在の論理構造の追究を目指すものであると同時に，そこから新な発展の論理構造を見出そうとする企てに他ならないのである．

われわれは，人類学における上述の体系と構造の連関をふまえつつ，次に現在学として規定した場合の社会学がもつ論理性を大まかにでも整序しておきたいと思う．

註

(1)　レヴィ＝ストラウスは，自らの科学を人類学に求めつつ，それを「人間の科学」と規定することによって，神話の探求者と同程度に，歴史や社会慣行における生きた知的諸形式，象徴可能性の創造者たらんとする，ここでは紙面の都合上，方法としての「構造」に限って述べるだけにとどめる．

四　構造論の社会学的応用

これまでのところで現在学としての社会学の構想を念頭におきつつ，それに有効であろうと思われる構造のいくつかの概念に主として人類学の側から検討を加えてみた．そして特に，レヴィ＝ストラウスが構造をこれまでの様に実在的に直接観察可能なものとしてよりは，むしろそれを「モデル」として考えることによって，構造論に方法論的な新な発展をもたらした点を指摘してきた．さらにその様な構造の特性は，構造論に不可欠な体系の問題と，それにともなうレヴェル論を論理的に整序することによって，現在学としての社会学に接近しうるものと考えられる．

構造論は分析理論から発足するために，なんらかの分析の枠組を必要とする．それは一般に体系として措定されるわけであるが，それ自身は決して実体としてあるのではなく，概念的に認識されるものである．それ故に，その体系は自己完結的な閉ざされたものとしてあるのではなく，つねに開かれたものとしてあり，その内には自らをも否定していくような契機さえふくんでいる．この様な体系のなかに含まれているいくつかの構成要素の諸関係，配置などの全体性の内的分析として，構造はモデル化されるのである．つまり，構造とは，まず概念的に認識された体系の特性として考えられるべきものである．それ故に，構造はまずより深い真の実在的な構造に到達するための道具としてあり，その意味では決して固定的に考えられるべきものではなく，むしろそれを操作していくことによって，体系それ自体の変化の要因をも把えることが可能になってくる．社会学が扱おうとしている「現在」とは，具体的な人間の限られた経験的な日常性から発足するが，それはたとえ現実的に極小な単位としての体系の認識から発足するものであっても，つねに社会総体における全体性の追求を目ざすような広がりを備えもっている．レヴィ＝ストラウスが，モデルとしての構造の特徴である体系性を，更に「諸秩序の秩序」の無限の追求として考えている

のはこのことにつながっている．しかし，その様な体系性の無限の追求も，現実的にはつねにそのつどの社会総体の範囲に直面せざるをえず，また，そうすることが具体的な人間社会の現実認識を可能にする極大値として，最も有効性をもちうると考えられる．つまり，「諸秩序の秩序」は，「諸体系の体系」と置換することができ，それぞれの体系に相応している特性が「諸構造の構造」となって考えられてくる．だとすれば，社会総体とは，開かれた全体社会体系のことであり，それは諸々の下位体系(sub-system)を内包して全体を形成してが，その特性は全体的社会「構造(fabric)」として把握され，下位体系もまたそれぞれの構造的特性をもっている．そしてこの様な社会総体は，内在的な矛盾とそれらのより高度な社会的統合を志向しながら，実際には相対的に独立した「現在」という体系性をもって概念的に認識される歴史的抽象にほかならないのである．現在学としての社会学は，この様な歴史的抽象を未来志向的な創造的主体のもつ経験的な現在からとき起そうとする科学である．

レヴィストラウスは，モデルとしての構造を諸々のレヴェルとオーダーにおいて駆使し，それによって全体社会の，また究極的には人類社会全体の《構造》を発見しようとしている．それは「諸秩序の秩序」の概念の豊饒性のうちにある．この様な体系と構造の考え方は，それら体系の特性である構造的連関として，全体社会の構造的統一性を明らかにする方向にあるが，同時に，諸体系における相対的な「自律性(autonomy)」をも認める視点をもっている．それは，たとえ史的唯物論に依ったかたちで，経済的構造が土台として総体を包括的に規定しているとしても，なおかつ認められなければならない点である．自律性とは，決して被他律性のことではなく，同じレヴェルにおける他律性との相剋によってのみ自覚されるものであり，そこにおいてこそ社会の発展的な契機となりうることが約束されるものである．

社会総体は諸々の構成要素の相互作用によって形成されているが，それがたんに均衡的に相互依存的関係だけで統一されていることは少なく，む

しろ，諸々の内的な矛盾をも含みながら，全体としてはある一定の統一体となって顕在化しているに過ぎない．それ故に，社会は変化し発展するわけであり，その内的な矛盾の多くは構成諸要素なり，諸々の下位体系のもつ内在的な自律性の結果にほかならないのである．

例えば，近代の市民社会は，資本主義的な生産様式を経済的構造として土台にもちながら，政治や法律，そして意識の面においては，なお封建「遺制」や過去の社会の「残存」と呼ばれる社会関係をその内にふくみながら，現象的には，全体として「近代」社会を形成している．そのことは，まさにそれぞれの要素が自律性をもっていることを示すが，同時にその様な諸関係を存続せしめている構造的連関を見逃してはならないであろう．それが究極において経済的構造であたっとしても，そこでは諸要素の自律性さえをもひとつの正統性をもったものとして認めうるような根拠が語られなければ，それらの相互作用の総体としての社会はとらえられないであろう．現象だけにとどまらない，また擬製態としての「近代」社会ではなく，真の近代社会の構造的な検討は，おそらくこの様な手続をへることが必要であろう．そして，この様な自律的な社会諸関係は，社会総体におけると同様に，そこに内包する他の諸々の下位総体においても，それらの相互性のひとつとして認められねばならぬものである．

また，社会関係においては，人間の具体的な営為のすべてがつねに目的手段という意識的合理的な関係の結果とは限らない．日常の生活過程を生きる人間は，この目的手段という合理的な関係をすでに経験的な「知識」knowledgeとして自らのなかに無意識のうちに備えもっていることが多い[(1)]．彼らは無意識のうちにその経験的に累積された知識を引き出し，照合させつつ日常的な行動を営んでいる．それは自らのうちに慣習として構造的に定着化，固定化されていく傾向にあり，そこからの脱出は新な目的手段の意識的な行動を必要とする．その場合，その行為はすでに定着化，固定化されつつある局面とは別のレヴェルにおいて行なわれ，そこからのフィード・バッ

クを相互に行なっていく過程において新な発展が方向づけられる.

諸個人の具体的な行動は，彼の経験的な累積からなる規範的性格をもった「知識」に負うところが大きいが，そこでの行動は無意識的である限り，彼らの営みはその人間が経験してきた生活の範囲を主体的にのり越えることができないであろう．しかし，すべての人間はさまざまなレヴェルにおいて新な目的をめざし，それを成しとげるための手段を意識的に駆使することがでる.

社会総体は，この様な諸々のレヴェルとオーダーにおける体系間の相互関係の全体であって，そこにそれぞれの体系の自律性を認めない限り，動態的性格をもった社会の把握はありえず，また，日常的で具体的な人間の行動からそれを把えようとすれば，まずそれらの社会的に形象化された「規範」が分析の対象として有効となってくる．レヴィ＝ストラウスは，普段は意識されない隠された構造を発見するためにモデルとしての構造を設ける時の手掛りとして，この規範に注目している．それは宗教的信念や社会的な思考の在り方，慣行，習俗などの日常的な行動の動機提出と同時に，それらを存続させようとする性格をもっている．そして，それは時々，観察主体をして構造それ自体として認識させる危険性をもち，その意味では真の構造の把握にとっては阻害要因となることさえある.

例えば，あるひとつの社会の親族や婚姻に関する諸規範は，その社会の諸制度のすべてをおおうものではないが，それはつねにその社会の構成を説明する構造的特徴を示している．そしてその親族や婚姻の諸規範は，諸々の領域において，さまざまなレヴェルに対応する体系を含んだ全体社会において，もっとも効果的にその社会を説明する位置にあることを示している．そのことは，その諸規範が全体社会におけるさまざまな相互作用の諸様相において自律的であると同時に，ひとつの優位性を占めているものと考えられる.

モデルとしての構造は，この様な特徴をもつ諸規範に注目し，それを素

材にして組みたてることから追求される．「諸秩序の秩序」あるいは「諸体系の体系」は，それぞれ自律性をもちながら，相互に関係し合って全体社会を形成しており，その意味では，全体社会体系とは，むしろ動態的性格をもった「体制(system)」と見做すことができるであろう[2]．

この点からみれば，K・マルクスが「経済学批判・序説」において試みた社会構成についての論理的枠組との類似点をみることもできる．それは社会総体の概念的な認識をふまえたもので，レヴィ＝ストラウスも指摘しているようにひとつの構造論的な視点を示唆しているといえよう．

K・マルクスは，さまざまな諸体系からなる社会の構成を包括的に土台で規定するものとして経済的構造を据え，それに対応するような形で政治，法律などの諸制度を，更にその上に宗教や芸術などの意識の体系を，いわゆる「上部構造」という形で設定している．経済的構造は，社会総体を生産関係の総体とみなし，それに対して全体的規定性を示すが，同時にそれと諸制度の体系及び意識の体系のそれぞれのレヴェルにおける構造的自律性をも相対的に認めているものと考えられる．

そして，その様な視点を上述してきた構造論の論理的脈絡のなかで考えてみれば，社会総体は諸々の下位体系をそれぞれ無限数個もつ「制度の体系」と「意識の体系」を，諸秩序の束である「秩序」としてもつことであり，それらはまた経済的構造によって包括的に土台から規定されながらも，それぞれの体系を構造的連関において結びつけつつ複合的な全体社会を形成していくのである．

ここに至って，モデルとしての構造も，諸個人の経験的な所与の現在から発足して，その体系の特性として設定されるにしても，それはつねに開かれた全体として現実的な社会総体に再び直面せざるをえないのであり，だとすれば，それはいわゆるK・マルクスにおける「土台と上部構造」の問題に大きく関わってくるであろうし，そうなることによって構造論は分析的視点から総合的視点へと視野を広めていくことになるであろう．

これまでのところで明らかように，構造とは本来，人間の具体的な生活過程において，もっとも現実的な社会関係を存在せしめる斉一性，規則性でもあり，ある一定の正統性をもってひとつの秩序の原理をなしている．それは歴史的社会的現実の基本的な在り方を規定していくもので，社会文化事象とその諸々の関係はそれぞれ自律性をもちながらも，この構造的特性によって具体的に表現されている．しかし，その現象された構造的特性は，時々，偽りの特性であることが多く，いわば見せかけの擬製態であり，その意味では内在的な特性である自律性の分析が，真の実在としての構造に迫りうる可能性をもっているし，変化の要因もそこでの相剋から把握されるべきであろう．それ故，モデルの設定は，この偽りの構造性をもつ諸規範に注目し，それを対象化しつつ，その内的分析から発足して，より深い実在としてある構造へと接近することであり，その作業は可能な限りのあらゆるレヴェルとオーダーにおいてなされなければならないことになるであろう．

そしてまた，ある一定の構造性をもつ諸規範は，たとえそれが偽りのものであっても，日常的な生活過程において人間を具体的に現在あるように存在させている媒介でもあり，同時にそれに絡む社会的諸関係をも同様の仕方で規定しているものである．しかも，それは最初は目的手段的な意識的，合理的な関係であっても，決してそれだけの完結態としてあるのではなく，くり返し営まれる同類の日常的な行動の集積として慣習的に無意識的に形成されていくものであって，そこには個人的な「感性」をも含んだ否定の契機さえをも内包している．その様な日常的な規範の体系こそが具体的な人間の行動の場としての「現在」であり，意図的に体系化された法律及び政治的諸制度は，この様な人間の生活過程のなかから意識的に昇華されたものにほかならず，またそれらは「政治的支配」として外在的な拘束性となって顕われる．この意味からも，モデルとしての構造は諸規範の体系である全体性の内的分析から発足して，全体社会の構造的連関をも把

握しうるような形で設定されなければならないであろう．そこではあるひとつの体系の内的分析が構成要素の存在の正統性や適応性ばかりでなく，それを否定するような要因においても考慮されていなければならず，またその基底となる体系から他の諸体系との連関も同様な仕方で予測されていなければならない．

構造は，つねにその特徴として規範性をもち，それは道徳的な基準を含んでいると同時に，諸個人の感性的なものや嗜好さえをも含んでいる．その様な，いわば主観的な諸個人にみられる相互行為のなかからも，自然発生的に生ずる規範性は，その日常的なくり返しの過程をへて意識的に体系化されたとき，ひとつの統一的な制度として定着化，固定化されてくる．その場合，この規範の定着化の過程も，自然史的な法則性に矛盾しないことは当然であろう．

これまでのところで見たように，社会学は所与の現在の日常性のなかでくり返し営まれる規範性に注目し，そこでの具体的な人間のさまざまな社会的営為の関係を過去との連続において，また同時に未来志向的にとらえようとする．そして，そこでの具体的な人間は，自らの日常的な生活圏をつねに目的合理的にだけではなく，感性的な行為をも含めたところで，経験的にくり返し営んでいる．そして諸個人それぞれは，自らの所与の生活圏を日常的な現在として生きる過程において，さまざまな「知識」を経験的に獲得し，蓄積してきている．そのような経験的な知識は，いわば諸個人それぞれの主観的な「規範」として彼らの「下意識」(pre-consciousness)のレヴェルに貯えられていくものである．そこには諸々の社会的感情を，論理的に可知化した意味として，客体へ伝達しようとする人間の思考と表現の主体的な行為を動機づける場が，「意識されたもの」との関係において形成されている．そして更に，生きた具体的な人間は，自らの下意識に貯えられたさまざまな経験的な知識と，意識されたものとして形象する諸々の社会文化事象との間における抽出の相互作用をくり返すことによって，それらを包括的に

より深遠なところで規定している「意識されない」構造の解読(de-coding)に向おうとするのである[2]．そこにデモルとしての構造が設定される場合のもうひとつの有効性がある．と同時に，現在学としての社会学は，対象化された歴史的抽象としての現在をそのまま認識主体の現在にもあてはめてくる．モデルとしての構造も結局この様な主体の創造性によって構成される．レヴィ＝ストラウスもこの様な関係について次の如く述べている．

意識されないものは，いつでも空である．あるいは一層正確には，それはさまざまなイメージに対して，あたかも胃袋がそこを通る食物と無縁なように無縁である．意識されないものは，ある特定の機能をもった器官であって，その働きはただ衝動，情動，表象，記憶など他からきた分節化されてない諸要素に，構造的な法則を課することだけである．そこからいえることは，下意識的なものとは，そのなかでわれわれ一人一人が自分の個人的な歴史の語彙(vocaburary)を蓄積する個別的な小辞典だ，ということであろう．しかもこの語彙は，意識されないものが自己の法則に従ってそれを組織化するかぎりにおいてのみ，われわれ自身にとっても，他人に対しても意味をもつのである．(Structural Anthropology p. 203)

つまり，意識されないものは，その構造的特性でもって衝動，情動等々を可知化するものであり，諸個人の間の意味の伝達は，この特性に従って組み立てられることによってのみ，他者に伝えられるのである．そして下意識の体系は，ある具体的な人間の生活過程のなかから経験的，歴史的に積みかさねられた記憶(recollection)とイメージの貯水池にほかならず，それは，意識されない記憶(memory)の一局面としてある．それは諸個人の経験的，歴史的な生活過程をへることによって築かれた知識や意味の貯蔵庫であり，人間主体は自らの貯蔵庫から知識や意味を引出し，整序することによって，意識されたものとの相剋をはじめて成し遂げることになる．

社会学は，その様な相剋をそれぞれ所与の現在，すなわち社会文化事象とそこに関係する具体的な人間とを包括する日常的な現在を分析し，論理

的に対象化し，モデル化することによって，偽わりのない意識されない真の実在としての構造に迫ろうとする．と同時に，社会学は，それらを経験的には極小の体系から発足させるとしても，認識的には極大の総体へ向けて，ひとつひとつ実証していく過程において，自らも同様に創造的な主体として自らの所与の現在を未来志向的に生きるような主体によって担われる必要があろう．そこには客体に対して，自らも客体として働きかける創造的主体が真の主体として語られてくるであろう．そしてまた，そこにおいてこそ認識的に把握されてきた社会総体は，実体として顕在化してくるのである．現在学としての社会学は，おそらくこの様な創造主体によって担われた歴史的抽象としての現在を未来志向的に，その根底から解きあかしていくものとして構想されてくるのるのである．

註

(1) ここでいう「知識」(Knowledge)とは，広義の意味で，ある個人が生来的に，経験的に認識よって得られたすべてを指す．それは個人のうちに無意識的に「語彙」(vocaburary)としてまた「記憶」(recollection)として蓄積されている．そしてそれらの集合は「常識の歴史」(柳田国男) となって，より社会的な意味をもってくる．

(2) 「体系」の考え方は，パレートによって整理され，機能理論にとっては不可欠な中心概念である．それはパースンズ，マートンによって発展したが，そこでもつねに固定的な均衡概念を前提としていた．詳論を避けざるをえないが「体系」は動態概念としてすぐれて歴史性をもった「体制」と関連させて考えてみる必要があろう．

(3) 「コード」(code)とは，いわば意味を可知化する構造である．レヴィ＝ストラウスはスタイナーとの対話で次の如く述べている．「なにごとでも人の心に起ることの本当の意味は表面にはなく，解釈の作業を通して引き出されねばならない．私にはマルクスは社会科学に一種の『解読』を導入した最初の人だったと思います．……人間の諸制度は，解読されてはじめて意味をもつという考えを導入したわけです．」ここにレヴィ＝ストラウスが人類学者としてだけでなく，現代の思想家としても高い評価を受けることになる．

(4) この小論では，人類学における構造論のいくつかの整序とその上での現在学

としての社会学との連関を原理的なところに限って述べた．極めて限られた紙面の都合上，詳論を必要する部分が多々あるが，それらは今後機会のあるごとに論じ，またその上で再度この小論の全体をも再検討してみたいと思う．

(1970 年 10月稿)

Sociological Develoyment of Structural Theory in Anthropology

Yukio Tozawa

Résumé

Social cultural fact has two characteristic sides, "the historical and the structural." Therefore, it should be studied scientifically from the two sides. Generally, the historical has been studied by history and the structural has been by anthropology. But I think they should be fundamentally studied as a whole. In this article, first, the some concepts of "structure" are mainly adjusted and studied. They are that of R. Brown, R. Firth and C. Levi-Strauss. Especially, we must pay attention to the structure which Levi-Strauss thinks as a model, since it seems that the structure as a general idea has a possibility to approach to the historical. When we try to think of sociology as an actual science and begin to cognize a concret social fact, the character of such structure will offer us a unique suggestion.